月刊 つばさ

ORTIC

私たちは、皆さまを新たな発展と飛躍へ導く“翼”となります。

2014年1月号

経験を積んでこその、初心。

2014年が始まりました。旧年中にいただいた皆様からのご厚情に感謝しつつ、本年もORTIC一同、力を合わせて前へ進んでいく所存です。ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年発売した『すっぽん梅肉黒酢』もおかげさまでご好評をいただいています。また、3年前から動き出した輸出の案件も、ようやく具体的な商談になり始めてきました。

この3年間、輸出という大きな目標にトライしてきたことで、たくさんのことを学ばせていただきました。“海外のお取引先様にどうやって満足していただくか”に尽きるのですが、価値観が違う相手への対応では、自分を客観視できる冷静さが必要です。“自分はこだわり過ぎていないか”と自問自答しながら、相手の要望をしっかりと聴く耳を養わねばなりません。要望の背景にあるその国の現状も勉強し、お互いに納得しながら進めてきたことが、今につながっている気がします。

輸出はその期待の大きさに比例するように、実現への難しさを感じますが、日本製品への信頼は今も厚く、先人たちが築いてくれた安全性や高度な技術に支えられていることを本当に実感します。また、海外での商談を経験すると、日本での商談がどんなに恵まれているかを改めて感じます。国内のお客様をもっともっと大切にしたいと心から思えます。

3年間で培った感性や判断基準を土台にして、2014年は初心に帰りたいと思います。本に例えると、表紙をめくり目次が見えてきたところ。謙虚に熱く新たな挑戦をはじめます。

株式会社ORTIC
代表取締役
印藤晴子

スタッフ日記 ～今年の抱負を漢字一文字で～

印藤晴子

駆

午年にちなんで、この漢字にしてみました。夢に向かって“駆”け抜ける一年にしたいと思います。新しい年への思いを漢字一文字で表すって、なかなか難しいものですが、みんな楽しそうに考えていました。その様子を見て、いい一年になりそうな気がしたのでした。

重富幸治郎

昇

数年前には想像もしていなかった輸出の商談をはじめ、昨年は業務の幅がずいぶんと拡がりました。ビジネス英語を勉強し、海外のお客様とメールのやりとりをするなど、挑戦することも増えました。昨年までの経験を活かし、今年も何事にも限界を決めず、上“昇”していきたいと思います。

初

初心忘るべからずの“初”。仕事もプライベートも慣れてくると緊張感がなくなり、つい気がゆるみがちになります。一年を通して、気を引き締めていきたいと思います。もう一つは初挑戦の“初”。一度しかない人生だから、やりたいと思ったことは何でもやってみたいです。

古賀ちはる

弾

昨年も様々なことに挑戦しました。新しく出会った人や始めた事によって、自分の立場も考え方もどんどん変化していきました。今年は、変化しながらも本来の意図を忘れず、自分の場所に立ち返って、さらに成長していきたいと思います。そんな弾力性のある“弾”んだ年にしていきたいです。

重松順子

坂井美穂

馬

社長と同じで、今年の干支にちなんでみたのですけれど、ちょっとストレート過ぎましたか(汗)。自分としては、“馬”力を出して、“馬”車“馬”のように働こうかと思っているのですが(笑)。皆様、どうぞよろしくお願いします。

後藤小百合

磨

内面を“磨”き、外見を“磨”き、人間として一歩ずつ成長してゆけるように、努力を怠らない!そんな気持ちで、この漢字にしてみました。何でも磨けば、輝く!?…はずですよね(苦笑)。

食

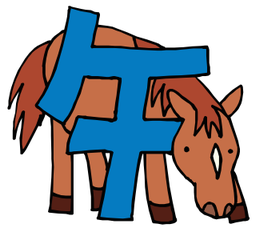
決して、食べまくる一年にするって意味じゃないですよ(笑)。人を良くする、と書いて“食”。健康のためにも、人生を楽しむためにも、人として良くなるために、食にこだわる一年にしたいです。

東恵美

動

閃きは未来からのメッセージだと聞いたことがあります。自分の心を信じて努力していると、必ず閃きがあるそうで、その閃きを信じて次の行動に移していくと、自然とまた閃きが訪れるそうです。でも実際にやってみるとなると、これまでの考え方が行動を遮ってしまいます。今年こそは頭に浮かんだ閃きを大切にして、行“動”に移していこうと思います。未来からのメッセージが私に何を教えてくれるのか、とても楽しみです。

石原洋子



株式会社オルテェック
〒810-0001 福岡市中央区天神2-8-41　福岡朝日会館11階
TEL.092-737-2128　FAX.092-737-2137
http://www.ortic.co.jp

気になる豆知識

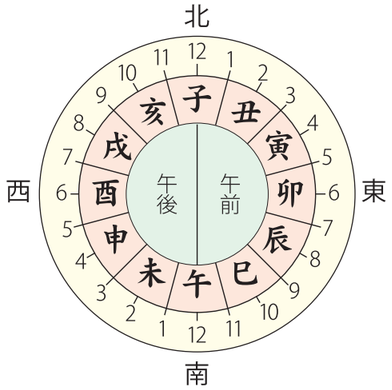
2014年、甲午ってどんな年?

自分の干支は知っていても、年に付いている干支の意味は知らない人が多いのでは?　年の初めに、古来から続く「十干十二支（じっかんじゅうにし）」の考え方から、今年「甲午（きのえうま）」についてお話します。

そもそも、十干十二支って?

十干十二支の起源は、中国の殷時代にさかのぼります。もとは順番を表す数学的なもので、年・月・日・時刻・方角などに用いられました。やがて陰陽五行説と結びつき、一つ一つの漢字が意味をもち、その年の運勢や時世の流れを読むために使われるようになりました。

十干は…甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと）の10種類、十二支は…子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の12種類からなります。干は幹、支は枝という意味で、この2つを併せて、その年の意味をなします。また10と12の最小公倍数は60ですから、干支は60年で一周します。60歳のお祝いを「還暦」と呼ぶのは「暦が一周して、もとに還りましたよ」という意味なのです。



1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳	7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉
11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未
21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳
31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯
41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑
51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥

甲の持つ意味

甲は、草木の芽が殻を破って、あたまを出した象形文字。「始め、新しい風、向上、発展、振動」という意味があります。時世の流れとしては「旧体制が破れて、革新が始まる」という意味をもっています。

10年を一単位として時代の趣が変わるとされている「十干」で、最初に出てくる甲は、まさに「始まりの年」。昨年までの10年とは全く異なる、新たな10年が始まりましたよ、と告げています。

午の持つ意味

午は杵の象形文字で、両方から杵を交互に上下させて米をつく姿から、強い力が働く様子を表していると言われます。また、太陽が最も高く上がった状態を示します。お昼の12時を正午と呼び、その前後を午前、午後と呼ぶのはこのためです。

十二支の折り返し点である午は、正午を挟んで午前と午後の状態が異なるように、「前半とは違う、後半６年の始まり」を告げます。「世の中は新たな年の始まりとなり、今までの慣習などは通用しなくなる」という意味をもっています。

甲午はどんな年になる?

新しい時代の始まりをさす甲と、これまでの流れを変える午が合わさる今年は、60年で一周する十干十二支のまさに31年目、折り返しの年にあたります。

1834年、天保の甲午の年に天保の改革が施行され、1894年、明治の甲午の年に日清戦争が開戦になりました。1954年の昭和の甲午の年には民主党が結党し、民主国家の礎が確立されることとなりました。

こうした歴史の一面からも、2014年は新しい流れの始まりという意識をもって、過去の成功事例などをあてにせず、柔軟な思考で生きていく覚悟が必要ですね。

先人たちが長い年月をかけて導きだした「干支」という物事の捉え方には、私たちが厳しい時代を生き抜くためのヒントが隠されているかもしれません。心の片隅に「甲午」の生き方を留めていただければ、幸いです。

それ、ウソです

丸山寛之

丸山寛之 プロフィール

医療ジャーナリスト。NPO法人日本医学ジャーナリスト協会会員。1932年、鹿児島県生まれ。新聞記者、医学雑誌編集者を経て医療ライター。1960年代初めから面接取材した医師・医学者は優に1000名を超える。著書＝「がんはいい病気」（マキノ出版）「読むサプリ」（明拓出版）「この酔狂な医者たち」（草思社）「ビジネスマン元気術」（日本マンパワー出版）など。雑誌「壮快」に「名医に聞く」連載中。Webサイトに「健康１日１話」http://www.maru-san.info/ を開設している。

第７３回

涙の勘違い

緑内障は視神経が傷ついて視野が狭くなる病気で、日本人の失明原因の1位だ。一般的に涙の排出ルートが詰まり、目の中の圧力（眼圧）が高くなって発症する。（「1分で知る豆医学　目{1}気づきにくい緑内障」＝朝日新聞2012年12月25日）

いえいえ、緑内障と「涙」はなぁーんも関係ありません。関係あるのは「房水（ぼうすい）」です。

房水というのは、眼球内を流れる透明な液体。血管のない角膜や水晶体などに、血液にかわって酸素と栄養を補給する。

房水は、水晶体を囲む毛様体でつくられ、後房（虹彩の後面）をうるおし、瞳孔を通って前房（虹彩の前面）に入り，虹彩（茶目）の根元と角膜（黒目）が接する部分の隅角（すみかく）からシュレム管を経て眼球外の血管に排出される。

毛様体から分泌される房水の量（毎分約３μℓ（マイクロリットル）＝100万分ノ３ℓ）と、隅角から流れ出る房水の量が同じなら、眼球内には常に一定量の房水が流れて、一定の圧力（眼圧）が保たれる。正常眼圧の値は10～20mmHgである。

ところが、なんらかの原因によって隅角からの房水の排出が妨げられると、眼圧が上昇し、視神経が障害されて、視野が狭くなり、視力が低下する。

重症例では角膜がむくんで瞳が緑色に見える。緑内障という名のゆえんである。昔は青底翳（あおそこ）と呼ばれた。

一口に緑内障といっても、いくつか異なる種類がある。大別すると、生まれつき隅角のつくりが不十分なための先天緑内障、ほかの目の病気や全身の病気、外傷、ステロイド剤の使い過ぎなどによる続発緑内障、原因不明の原発緑内障（緑内障の大半はこれ）の三つで、続発と原発は、隅角がふさがってしまう「閉塞（へいそく）隅角緑内障」と、隅角はふさがってはいないが、フィルターが目詰まりしたような状態になる「開放隅角緑内障」に分かれる。

急性タイプの閉塞隅角緑内障は、せき止められた房水の作用で眼圧が急激に上昇し、激しい頭痛、目の痛み、悪心（おしん）、嘔吐（おうと）に襲われ、視力がたちまち低下する。眼科疾患のなかの超緊急のエマージェンシーである。

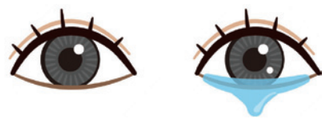
開放隅角緑内障は、房水が排出されにくくなるため、眼圧がじわじわ上がり、視野がだんだん狭くなる。瞳の色はもちろん、痛みや充血といった症状も全くなしに進行する。気づいたときは失明寸前という人が、とても多い。

そこで、緑内障の早期発見のためには定期的な眼圧検査が不可欠―といわれたが、それは昔の話。

近年、眼圧は正常範囲にありながら、開放隅角緑内障と同じ変化が起こってくる「正常眼圧緑内障」があることがわかった。しかも日本人の緑内障では、それが約70％を占めるというのだから、厄介だ。

眼圧検査だけでは緑内障は発見できない。視神経に異常がないかを調べる眼底検査が必要だ。が、高血圧や糖尿病など生活習慣病による変化を調べるための眼底の広い範囲を撮る眼底写真ではダメ。視神経がクローズアップされた写真でなければいけない。

緑内障が始まるのは老眼が進む時期と重なる。老眼鏡を替えるたびに、眼科で眼鏡の処方箋（しょほうせん）を作ってもらい、併せて眼圧と眼底の検査も受けるというのはどうでしょう。発見が早いほど効果的に病気の進行を防ぐことができる。

なお、「涙の排出ルートが詰まる」病気は、涙道狭窄・閉塞症である。涙腺でつくられて流れでた涙は、目全体に広がり、目頭にある涙点という孔から涙小管→涙嚢（るいのう）→鼻涙管（びるいかん）を通って、鼻に排出される。涙小管や鼻涙管が狭くなったり、ふさがったりして、涙が流れていかないため、たえず目がうるみ、涙があふれてくる。

治療法はいくつかあり、わりあい簡単に治せる。